

矢野義治さんを偲ぶ

1992年（平成4年）12月の「サゴヤシ・サゴ文化研究会」発足以来、サゴヤシ学会の事務局を担当し、学会のために尽力された矢野義治さんが榊原記念病院（東京都府中市朝日町 3-16-1）で亡くなられた。謹んでご冥福をお祈りしたいと思います。

矢野さんは、1935年（昭和10年）12月13日に四国・今治で生まれました。1956年（昭和31年）に東京農工大学繊維学部に入學し、「繊維学」を専門として1960年（昭和35年）に卒業しました。この間、土壌学を専門分野とする黒部隆教授の下で「土壌学」を勉強し、卒業研究は、農事試験場（鴻巣）において、「土壌窒素の有効化メカニズム」をまとめ、東京農工大学に提出しました。卒業後、直ちに（株）松本製錬所に就職し、2年後の1962年（昭和37年）、母校の東京農工大学において副手（農学部）に採用され、大学キャンパスでの教育と研究に邁進されました。東京オリンピックに沸く1964年（昭和39年）に北海道開発局に着任され、我が国の経済成長に合わせ、北海道の開発に懸命に尽力されました。ペドロジーの権化である松井健さんに「我が国の三傑（尻?）」と言わせた三人は、矢野義治、古川久雄、菊池晃二です。ピットを掘り終わると見事な垂直断面が出来上がるとともに、左右に表層土と下層土が振り分けられ、埋め戻す準備が整えられているというプロフェッショナルな「よい仕事の出来る」職人の一人でした。北海道開発局の時代に、多くの方が、矢野さんにお世話になったと思われます。私の場合は、東京農工大学就職後はじめての北海道出張の時に、「名刺」をひと箱持参するようにとの電話をいただき、名刺を持参しますと、北海道開発局の職員ばかりでなく、札幌に卒業生約30名が集められており、「今度、農工大学に就職した岡崎です。どうぞよろしく。」と挨拶をいただき、私の名刺を一緒に配っていただきました。この出張で、本当に名刺箱一つが空になりました。北海道には、特別な土壌がいくつか存在しています。その一つが、泥炭土です。我が国の泥炭土の89%は北海道に分布しています。石狩、空知、上川支庁の泥炭地水田は48,496 haで、これら支庁の総水田面積 216,529 haの22%も占めています。泥炭地の開発に、いかに北海道開発局が力を尽くしてきたかがわかります。泥炭地の物理的性質を詳細に調べた結果を International Peat Congress で発表されたこともありました。泥炭は植物の分解が遅れて、厚く堆積して生成した有機質土壌です。植物から土壌が生成するのですが、温帯の泥炭土は草炭と呼ばれ、草本植生が主体ですが、熱帯の泥

炭土は、木質泥炭と呼ばれ、木本植生を主体としています。草本植生と木本植生の違いは大きいのですが、出来上がった泥炭土の性質はよく似たところが多くなります。

1984年（昭和59年）に北海道開発局から国立科学博物館筑波実験植物園に転出されました。植物と土壌の関連性について、さらに強く意識されるようになり、土壌科学は植物と土壌の両方を研究対象とする必要があると述べられています。1992年（平成4年）にサゴヤシ・サゴ文化研究会が発足すると、研究会に参加され、我が国のサゴヤシ研究の進展を世界に紹介することを楽しみにしていき、積極的に事務局幹事をサポートしていただきました。1994年（平成6年）に国立科学博物館筑波資料センター実験植物園長に就任され、忙しい日々を過ごされました。この間も、折に触れて、サゴヤシ学会のイベントを盛り上げるように気配りされました。1997年（平成9年）3月に国立科学博物館を退職されると、これまで以上に、サゴヤシ学会を事務局として支えてくれました。2001年（平成13年）につくば国際会議場で開催されたSago 2001では、サゴヤシに興味を抱いている、多くの研究者に声をかけていただきました。その後は、サゴヤシ学会事務局を庶務、会計のすべてを一手に引き受けてくれました。「サゴヤシ」の出版を心から喜んでおられましたし、学会設立20周年記念として英文版サゴヤシ（Sago palm）が上梓、出版されることを願っておられました。何より我が国の研究者のSago Palm 研究のレベルを世界に知らせる一番の方法であると常にアピールしておられました。

2011年（平成23年）12月13日に逝去されましたこと、本当に残念でたまりません。これからのサゴヤシ学会の発展を見ていただきたかったのに。

岡崎正規